

カブール大学復興支援に係る現地調査の概要

- 留学生・研究者受け入れ，技術協力に向けて -

東京農工大学

望月 貞成（工学部機械システム工学科）

田谷 一善（農学部獣医学科）

島田 清（農学部地域生態システム学科）

中久喜茂樹（学生部留学生課）

東京農工大学は、去る2002年5月に教官4名（望月，田谷，平沢および島田各教授）をカブール大学視察に派遣し、また、その際に両大学間の学术交流協定を締結した。その後、学内に「カブール大学復興支援室（室長 望月教授）」を設置し、文部科学省との協議の下に具体的な支援方法について検討を進めてきた。その結果、アフガニスタン支援の一環として、

(a) カブール大学から東京農工大学大学院への留学生受け入れ、および

(b) カブール大学教官の東京農工大学における短期研修

を計画した。(a)および(b)それぞれ10名ずつ募集することとし、カブール大学学長に推薦を依頼したところ、それぞれについて10名および15名の学長推薦を伴う応募があった。

今回の我々のカブール大学訪問の主な目的は、上記(a)および(b)に応募した候補者との面接を行うとともに、将来の技術協力に向けての調査および視察を行うことにあった。

アフガニスタンから日本の国立大学への留学生あるいは研究者の受け入れは今回が最初の試みであるため、過去に参考となる例が無い。また、かつては高いレベルを誇っていたカブール大学といえども、長い間の内戦により大学の教育機能は著しく低下していたため、提出された書類のみによりカブール大学からの応募者の質を判断することは困難かつ危険であると思われた。そこで、このたび文部科学省の支援により、東京農工大学カブール大学復興支援室のメンバーである教授3名（望月，田谷および島田）と学生部留学生課職員1名（中久喜）の計4名がカブール大学を訪れ、応募者全員に対する面接調査を実施す

ることとした。

留学生候補者および短期研修教官候補者との面接は、2002年11月6日から7日までの2日間、カブール大学の学長室において実施された。特に「留学生候補者」に対する面接は一人一人に十分な時間をかけ、様々な角度からの質問に答えさせた。

その結果、「留学生候補者」および「短期研修希望教官」いずれについても、各応募者は新しい知識を吸収したいという強い意欲を持ち、日本への留学あるいは短期研修を極めて真摯に考え希望していることがわかった。よい意味でのハングリースピリットを感じさせられた。いずれの留学生候補者もカブール大学の現役の若手教官であり、それぞれの分野における基本的専門知識については学部卒業程度以上のものを十分に有していると判断された。英語によるコミュニケーション能力は、個人差はあるが総じてかなり高いと言える。特に短期研修希望教官の多くは流暢な英語を話すことがわかった。

次に、将来の技術協力に向けてのカブール大学の現状視察を行った。最近ようやく全学の図書館にインターネットにアクセスできるコンピューターシステムが日本政府の支援により導入されたとのことである。学長室には、5月にはなかった複写機とコンピュータが各1台置かれていたが、コンピュータはまだインターネットに接続されるまでに至っていない。学長といえどもメールの送受信のためには図書館に出向かなければならない状況にある。電力事情がいまだ悪く、昼間は殆ど停電している。

農学部、工学部および獣医学部を手分けして訪問し調査を行ったが、いずれにおいても5月に訪問した折の状況から大きな変化は観られなかった。とにかく、相変わらず何も無い。農・工・獣医各学部いずれにおいても基本教育に最低限必要な機器さえ整えられていない。ただ、農学部と工学部には世界銀行からの資金が割り振られることになっているので、それによりいくらか学科共通的な設備を導入できると関係者は喜んでいて、後に詳細を述べる面接結果からも知られることであるが、カブール大学の人達のポテンシャルはかなり高い。しかし、教育研究に必要な最低限の機器さえ何一つ無い。したがって、人的支援と相俟った教育研究関連機器の支援を通じての技術協力は、少しの投資でも極めて大きな効果を生むであろうことは間違いない。

今回のカブール大学訪問に際しては、上記以外にも、カブール大学と「留学生受け入れに関する協定書」を新たに取り交わし、また、在アフガニスタン日本大使館推薦による留学生候補者との面接を行った。さらに、在アフガニスタ

ン日本大使館および JICA 駐在事務所（パキスタンのイスラマバードおよびアフガニスタンのカブル）をそれぞれ訪問し、アフガニスタン支援に関連した情報の収集を行った。

アフガニスタンの高等教育支援に関しては、日本以外にも米国、ドイツなどが動いているようである。米国は、Purdue 大学が中心となり人工衛星を利用した米国・アフガニスタン間のインタラクティブな教育システムの構築を発表している。ドイツの援助計画の詳細は定かではないが、最近ドイツより教授が何名かカブル大学を訪れしばらく滞在していたようで、その際講義なども行ったと聞いた。そのような中で、このたび文部科学省の支援を受けて東京農工大学が実施する二つの計画：(a) 東京農工大学大学院への留学生受け入れ、および (b) 東京農工大学におけるカブル大学教官の短期研修は、カブル大学にとって外国からの初めての実質的な支援であることがこのたびの訪問で確認された。

アフガニスタン支援の基本は、想像を絶するほど悲惨な状況におかれた中で復興に向けて懸命に努力している人々に援助の手を差し伸べたいというところにある。上記二つの計画もその一環である。このたび東京農工大学が受け入れる予定の留学生あるいは研修教官は、留学あるいは研修終了後カブル大学に戻り、日本で得た知識・経験を基に学生の教育を行い、それを通じてアフガニスタン国の再建に貢献したいと明言している。これらの計画に代表されるような形の人的支援は、留学生および研修者自身にとっても、またアフガニスタン国にとっても意義があるのみならず、日本にとっても政策的に重要かつ必要である。国際機関を通じて資金を提供する間接的支援や物的支援も必要であろうが、アフガニスタンの指導者を養成する最高学府であるカブル大学の教官層に良い意味での日本の影響を及ぼすことも大きな意義がある。

しかし、人的支援は継続して初めてその底力を発揮する。したがって、文部科学省および外務省をはじめとする日本国政府諸機関においては、今後とも上記二つの人的支援を継続されることを強く希望してやまない。

カブル大学の人的ポテンシャルはかなり高いにもかかわらず、教育研究に必要な最低限の機器さえ何一つ無い。したがって、教育研究関連機器の支援を通じての技術協力は極めて効果的であるといえる。まずは、一般的な日本の理科系の大学であればどこにでもあるような基本的な教育用機器の支援が望まれる。とにかく何も無いので、何を贈っても喜ばれることは間違いない。一方、高度の機材になると、それを必要とし、また使いこなすことのできる具体的な教官との関係を踏まえる必要が出てくるであろうが、今回は、運悪く 4 日間の滞在

中の 3 日間はイスラム休日と重なってしまったためもあり，そこまでの詳しい調査をすることはできなかった．ただ，再三述べたように，カブール大学には基本的能力が高い人材が多くいるので，その観点からの調査を行えば，具体的な機器に対するしっかりとした裏付けを持った多くの要望が出てくるであろう．

カブール滞在最終日の 8 日（金）は，イスラムの休日で，大学をはじめもろもろの活動が休みであった．我々は，カブール市を一望できる小高い山に車で登った．そこからは遠く雪をいただく神々しいほどの山々が眺望される．また，カブール市が周囲を山に囲まれた平地にあることが手に取るようにわかる．市内には緑もかなりあり，ここから観たカブールは実に美しい．カブール大学キャンパスは樹木に覆われた広大な敷地を有することが見てとれる．長い戦乱により市内の建物の多くは破壊され，人々の生活は苦しく，道路を走ると舗装路面にはあちこちで穴が開いており土埃が多く喉に変調をきたすが，この山から望むカブールは，広い道路を有し，町並みは整然とし，かといってあまり人工的でもなく，実に調和の取れた美しい市である．子供も大人も，市内のあちこちでタリバン時代には禁止されていた凧揚げに興じていた．平和である．しかし，遊ぶ子供たちの笑顔とその背景にある廃墟と化した建物群はあまりにもコントラストが強すぎる．この平和が続くことを祈らずにはいられなかった．